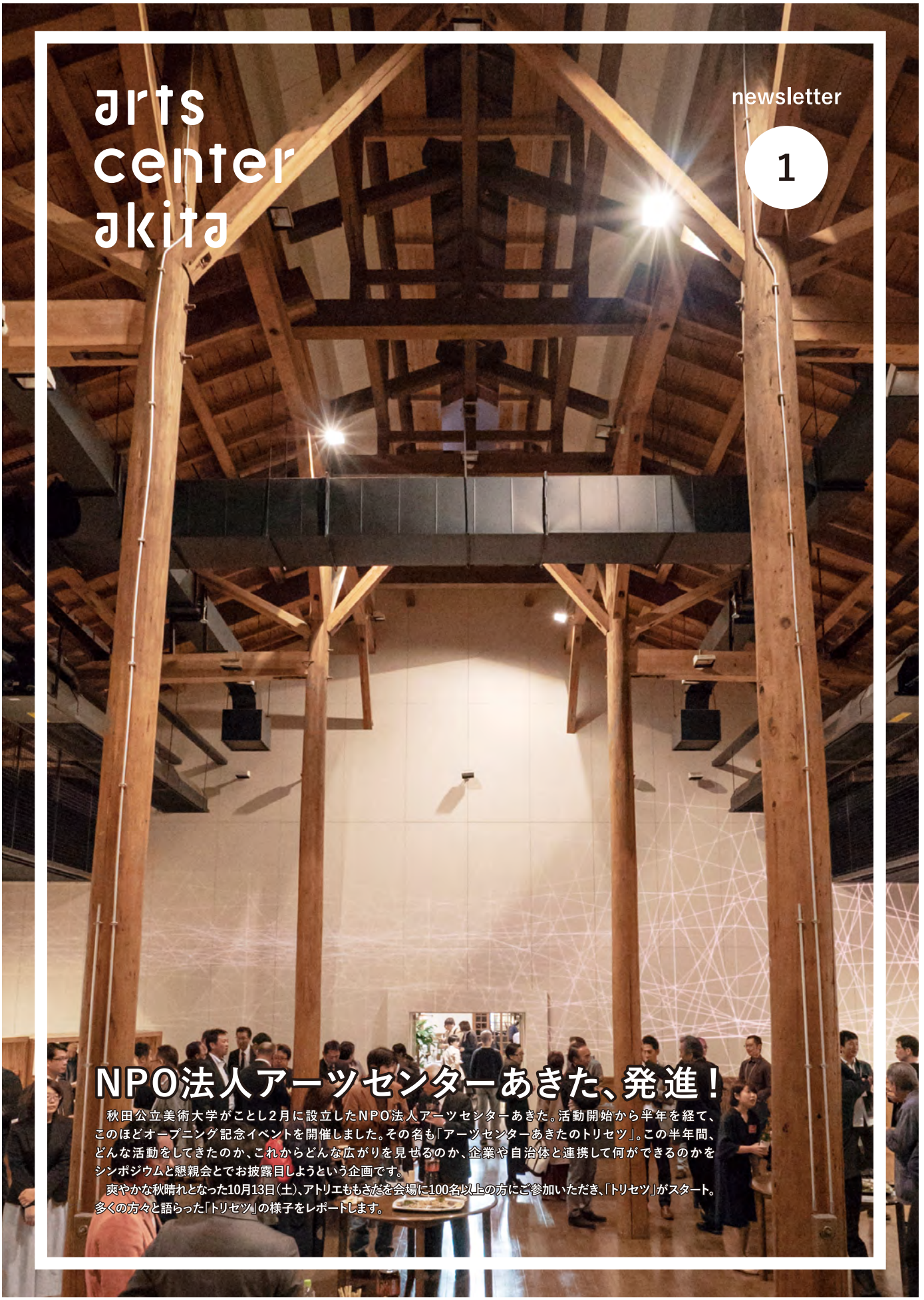
arts
center
akita

newsletter

1



NPO法人アーツセンターあきた、発進！

秋田公立美術大学がことし2月に設立したNPO法人アーツセンターあきた。活動開始から半年を経て、このほどオープニング記念イベントを開催しました。その名も「アーツセンターあきたのトリセツ」。この半年間、どんな活動をしてきたのか、これからどんな広がりを見せるのか、企業や自治体と連携して何ができるのかをシンポジウムと懇親会とでお披露目しようという企画です。

爽やかな秋晴れとなった10月13日（土）、アトリエももさだを会場に100名以上の方にご参加いただき、「トリセツ」がスタート。多くの方々と語らった「トリセツ」の様子をレポートします。

10年後、20年後の時代を、アートを生かしてつくっていく。

NPO 法人アーツセンターあきたはこの4月から動き始めました。手探りでの設立だったため、これからどういうかたちで活動が進むのかも分からないまま始まりましたが、どうにか活動の方向性も見えてきて、動き始めた状態です。こういう形でご披露しながら問題意識を共有できる場を設けることができたことをうれしく思います。

秋田公立美術大学に赴任して、この 10 月で4年経ちました。それまでは青森県の十和田市現代美術館におりましたが、そこはアーツセンターでもありました。美術館とアーツセンターの違いは何かというと、美術館には基本的に、これまでの時代をつくってきたものを保存し、展示し、それを後世に伝えていく機能があります。一方で近年、いろいろな地域にアーツセンターができました。これまでの時代をつくってきたものを扱う美術館に対して、アーツセンターはこれからの時代、10 年後、20 年後の時代を、アートを生かしてつくっていくためにどのような活動をしていくのかを考え、担っていく役割があると思っています。

十和田にいた頃、秋田に美大ができたと聞いて驚きました。公立の美術大学が設置されてから、秋田にいろいろな教員、助手、研究者などおもしろい人材が集まってくる。各地で活動をつくっていく仕事をしてきましたので、その視点から見ると秋田市の文化行政がそのまま美術大学というかたちに集結しているように見えました。そこには多くの人材と多くの可能性が集まっていて、それが秋田市、東北、ひいては日本全体に影響を与えるような、これからの時代に必要な新しい価値をつくる重要な場所として、拠点として、この大学は可能性を持っているのだと感じました。

当時から、大学の社会貢献センターには教員と事務局員、助手、学生はいましたがコーディネーターという存在がなかった。そこで、それまでの社会貢献センターを法人化して、新しく専門職としてコーディネーターを抱えながらこれからの秋田を一緒につくっていく拠点としました。企業や自治体と連携し、これからの若い人材に対して大学が本気で何ができるのか。その基盤となる重要な仕組みとしてつくったのがアーツセンターあきたです。大学の一部であるこのももさだの空間も、もっと活用していきたいと思います。こういうかたちで動き始めることに、喜びと興奮と期待を感じています。

秋田には美術大学があり、アーツセンターがあり、これからいろんな人たちと連携して何かができるのではないかと期待されるなかで、活動が動き始めています。一緒に盛り上げていただけばありがたく思います。

アーツセンターあきた　理事長
藤浩志（秋田公立美術大学副学長）

秋田に眠っているクリエイティビティのタネが発芽し、まちを豊かにする力となる。

大学の社会連携、地域連携を担う窓口として秋田公立美術大学が設立した NPO 法人アーツセンターあきた。立ち上げに際し、県内外からアート、デザイン、まちづくりなどに実績のある人材がコーディネーターとして集まり、4 月から活動を開始しました。アトリエもも さだ、フォンテ AKITA 内の美大サテライトセンターに総勢 10 名のスタッフが勤務。それぞれが多様な専門性を持ち、未来への思いを抱いて活動しています。

「わたしたちは、誰もがクリエイティブであると考えています。そして、そのクリエイティヴィティには、まちを変える力があると信じています。萌芽的な可能性を積極的に探り、全ての人々がクリエイティヴィティを発揮できる環境をつくります。その実現のために、人々のアイディアに受容的態度をもって接します。人と人を繋げていくことを意識して取り組みます。」

スタッフが共有しているのが、この行動指針。秋田公立美術大学には、秋田に暮らす人々や土地に眠っているクリエイティビティをより顕在化、より最大化できるようにサポートするスキルや経験、実績を持った人材が揃っています。土地と人材をうまく橋渡ししてつなぐことができれば、秋田に眠っているクリエイティビティのタネから芽が出て、まちを豊かにする力になるのではないかと考えています。

事務長・三富章恵

高校生に秋田で「超おもしろい合宿」をする公募企画「高校生クリエイティブキャンプ」を実施。日本全国の高校生に秋田をフィールドに「超おもしろい」という切り口のみで合宿プランを募り、応募いただいた中から長野県、東京都、大阪府の 3 団体を秋田に招き、合宿していただいた。高校生は自分たちの目線で秋田の魅力、価値を発掘して SNS 等を使って発信した。

上小阿仁村で開催されている「かみこあにプロジェクト」に協力。美大の教員が協力し始めてすでに 7 年目を迎えるプロジェクトにアーツセンターが関わり、教員、助手、学生の参加をサポートし、オリジナルグッズのデザイン制作にも協力。

大森山動物園と美大との連携事業に関わり、動物園だけでなく大森山公園一帯をギャラリーに見立て、教員や学生さんに作品制作をしていただいた。

地域と学生をつなぐ事業。能代の町内会と学生や卒業生を結びつけ、商店街のショーウインドウに作品を展示して地域を盛り上げていく「まちなか美術展」に協力。

企業や自治体にご依頼いただく中で、社会課題の解決に向けてアプローチする試みを実施。秋田赤十字乳児院の里親啓発事業では学生が乳児院や里親制度の状況をリサーチする中で、制度について地域の方々に理解していただき里子を受け入れてくれる方を増やすきっかけになるポスターを制作し、展覧会を開催。

アート、美術、デザインを通じた人材育成や担い手育成に関わる事業。美術に触れるなかで感性を育むことを目的とした子ども向けのアートワークショップを実施 。

中高生と美術をより結びつけ、美術に関心のある中高生の輪を広げようと、デッサンを自習で学び、美大の教員が合評会に参加することでスキルを高めていただく「素描 Lab」をスタート。

半年の歩み
2018.4-10

秋田公立美術大学は 2013 年に短大から 4 大化し、新しい芸術領域の創造に挑戦にする大学としてスタートを切りました。領域横断をテーマに、既存の美術大学、芸術大学の枠組みにとらわれないアーツ＆ルーツ専攻やものづくりデザイン専攻などユニークな専攻やカリキュラムを備え、国内外で活動するアーティスト、デザイナーなどの専門家、研究者などを教授陣に迎えています。秋美ではどんな教員がどんな専門性を持ち、どんなことに取り組んでいるのか。また、全国の美大の中でも秋美にはどんな特徴があるのか。そして今後、アーツセンターができたことによって秋美の資源を地域にどう結びつけていくのかについて話し合いました。

美大を知る、秋美を解く

第一部

田村 剛
（NPO 法人アーツセンターあきた
プログラム・コーディネーター）

阿部 由布子
（ビジュアルアーツ専攻助教）
アーティスト / キュレーター。九州大学大学院芸術工学府博士後期過程単位取得満期退学。2009 年秋田公立美術工芸短期大学講師就任。2013 年より現職。

分野を横断できるカリキュラム

（皆川） ほとんどの美術系大学は彫刻、日本画、油画、工芸、デザインなどがあり、技法で分けられている。秋美はそういう分け方をしていないことが特徴。日本にひとつしかない特徴のある専攻としては、アーツ＆ルーツ専攻があります。

（今中） 自分たちには、分野を分ける従来の美術教育を受けてきた課題意識がある。課題意識に目覚め、じつは自分がいま学んでいる手法では自分がやりたいことは表現しきれないんじゃないかという局面があり、分野を変えたり横断してみたいとなったときに、従来の美術教育の縦割りのシステムでは難しかった。自分の適正や課題意識を明らかにしているのが秋美のカリキュラム。自由に横断して歩ける魅力がありますね。

今中 隆介
（ものづくりデザイン専攻教授）
東京藝術大学大学院美術研究科修了。2003 年デザイン事務所アールホームワークス設立。2013 年より現職。
http://r-homeworks.jp/

連携することで、思わぬ方向に広がっていく

（山内） 美短から 4 大に変わり、2014 年に社会連携のあり方を打ち出す4つのビジョンを立てました。ローカルメディアを使って情報発信することや景観のこと、ネットワークのことなどの中のひとつに、街中にギャラリーを展開することがありました。その頃に CNA 秋田ケーブルテレビさんから、新社屋の外装について相談があり思い切って「ギャラリーを」と提案したところ、それが BIYONG POINT として実現することになった。思わぬ方向に広がった例として、CNA さんとの連携がありました。今後もこういった展開を意識していければ。その時は一過性のものであっても、その後はインフラとして整備されて、まち全体を俯瞰して見られればいい。大学、企業、自治体と連携していくために秋美を役立てられたらと思います。

（阿部） 地域で何ができるのかを一緒に考え、実現していく取り組みは今後、増えていくのではないでしょうか。さまざまな分野を横断する事業を展開する過程で、地域の力を結集して、文化を興す土壌ができつつあるのではないか。この傾向が加速することを期待したいと思います。

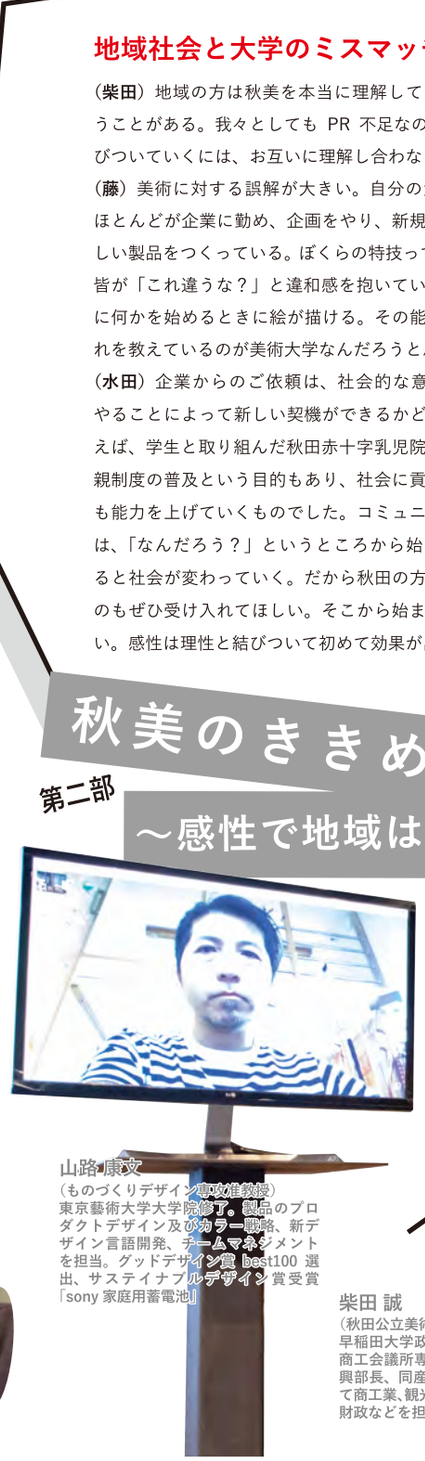
皆川 嘉博
（アーツ＆ルーツ専攻准教授）
彫刻家。東京藝術大学大学院美術研究科博士後期過程満期退学。2002 年秋田公立美術工芸短期大学講師就任。2006 年秋田県芸術選奨受賞。2013 年より現職。

山内 貴博
（景観デザイン専攻准教授）
建築家。東京藝術大学大学院美術研究科博士過程後期修了。建築設計事務所勤務を経て、2013 年より現職。

秋美のききめ

第二部

～感性で地域は変わる～



山路 康文
（ものづくりデザイン専攻准教授）
東京藝術大学大学院修了。製品のプロダクトデザイン及びカラー戦略、新デザイン言語開発、チームマネジメントを担当。グッドデザイン賞 best100 選出、サステイナブルデザイン賞受賞「sony 家庭用蓄電池」

藤 浩志
（秋田公立美術大学副学長）
京都市立芸術大学大学院美術研究科修了。パプアニューギニア国立芸術学校講師、都市計画事務所勤務を経て美術作家として活動。地域をフィールドに新しいプロジェクトを模索。
www.fujistudio.co

水田 圭
（コミュニケーションデザイン専攻准教授）
東京藝術大学大学院修了。フランス国立高等装飾美術学校招聘教官（2000-04）。カンヌ国際広告祭デザイン部門銀賞など。

地域社会と大学のミスマッチ

（柴田） 地域の方は秋美を本当に理解してくれているのかと思うことがある。我々としても PR 不足なのでしょう。地域と結びついていくには、お互いに理解し合わなければいけない。

（藤） 美術に対する誤解が大きい。自分の大学時代の同級生のほとんどが企業に勤め、企画をやり、新規事業開拓をやり、新しい製品をつくっている。ぼくらの特技って何なのかというと、皆が「これ違うな？」と違和感を抱いていることに対して、次に何かを始めるときに絵が描ける。その能力はすごく必要。それを教えているのが美術大学なんだろうと思います。

（水田） 企業からのご依頼は、社会的な意義があるかどうか、やることによって新しい契機ができるかどうかが重要です。例えば、学生と取り組んだ秋田赤十字乳児院さんのポスターは里親制度の普及という目的もあり、社会に貢献しながら自分たちも能力を上げていくものでした。コミュニケーションというのは、「なんだろう？」というところから始まっていく。そうすると社会が変わっていく。だから秋田の方は、居心地の悪いものもぜひ受け入れてほしい。そこから始まることはすごく大きい。感性は理性と結びついて初めて効果が出るんです。

THINK LOCAL, ACT GLOBAL

（山路） 各地で迎えている高齢化、人口減少、経済衰退などに対して、そういった課題が集中している秋田での解決に向けた取り組みは先例になる。秋田で暮らす人が感じる超ドメスティックな価値観を世界が共鳴する形で発信すれば、ムーブメントにつながるのではないか。

（藤） 集中して作り出すときは必ず閉じていないとできない。東北に来てひとつの可能性として感じているのは、環境的にも閉じることができる、だからこそひらくことができるということ。東京など常にひらかれた環境にいると、それ以前に何かをつくることや考えることが少なく、理性を育むことはできないのではないか。そこに危機感を感じています。

（三富） 課題先進県といわれている秋田で、アートやデザインを使ってその課題を少しでも和らげ、解決につなげるモデルができればそれは秋田だけでなく日本全国、あるいは同じ課題を抱える世界の地域にも応用できるはず。そんな最先端の社会のラボラトリー、実験室がアーツセンターの活動によって実現できるのではないかと信じています。

新しい活動を模索し、未知に向かっていく

（柴田） アーツセンターができたことは、秋美にとって大きな変化だ。アーツセンターができたことで、これまで先生たちだけでやってきたことがコーディネーターの専門集団ができ、大学にとっても企業にとっても、資源を活かせる環境が整った。ぜひ期待してもらいたいと思う。

（藤） 秋田市のいろいろなところにおもしろい過ごし方のできる空間が増えて、人が増えて、クリエイティブな仕事が増えて、ここにくれば自己実現できるんじゃないかと集まってきてしまうことだとか、ここで過ごしたらどんなに素敵だろうと思うような風景が広がっていく。常にチャレンジできて、失敗もしていく。そういう地域社会がこの延長にあるんじゃないかと思います。これまでの価値観にとらわれず、常に新しい価値観ややり方に妄想を広げていく。それを現実に当てはめるにはコーディネーターが必要。秋美には素晴らしい人たちがいて、この状況でしかできない、つくり出す力がある。未知に向かっていきたい。

柴田 誠
（秋田公立美術大学副理事長）
早稲田大学政治経済学部卒業。前秋田商工会議所専務理事、元秋田県企画振興部長、同産業労働部長。県職員として商工業、観光振興、地域プロジェクト、財政などを担当。元能代市助役。

三富 章恵
（NPO 法人アーツセンターあきた事務長）

新屋浜のグラスで乾杯！

懇親会を始める前に、秋田公立美術大学の地元・新屋にある秋田市新屋ガラス工房が新屋浜で採取した砂を使って開発したガラスを紹介させていただきました。新屋浜の砂から生み出された色味は、ほんのりと若草色。グラス表面の波打ちにきらりと映える色合いが、オープニング記念イベントに彩りを添えてくれました。新屋ガラス工房ではこの他、薪ストーブの灰を使った琥珀色、秋田酒造の酒粕から生み出した灰色のガラスも試験中。今後の展開にぜひご期待ください。

秋田市新屋ガラス工房
https://araya-glass.akita.jp

ご使用いただいたグラスは記念にお持ち帰りいただきました。

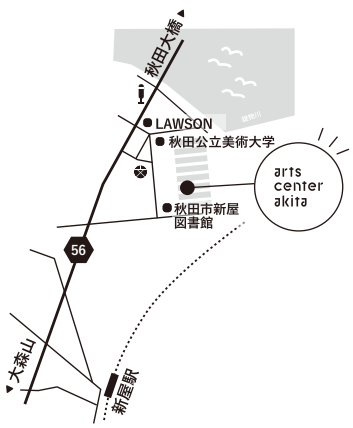
ガラス工房オリジナルのグラスで乾杯。

arts center akita　newsletter

2018/10 発行

「arts center akita newsletter」は、NPO 法人アーツセンターあきたが不定期に発行する情報誌です。

発行：NPO 法人アーツセンターあきた
テキスト：高橋 ともみ
写真：草彅 裕
デザイン：齊藤 夏帆

NPO 法人アーツセンターあきた
〒010-1632
秋田県秋田市大川町 12-3
秋田公立美術大学アトリエももさだ内
TEL : 018-888-8137　FAX : 018-888-8147
MAIL : info@artscenter-akita.jp

web　https://www.artscenter-akita.jp
facebook　https : //www.facebook.com/artscenter.akita/